

政界に入る

戦後の日本経済の復興は、何といっても国民のすぐれた能力と勤勉が、平和で自由な国際情勢の中で、その本領を發揮することができたから実ったものである。しかし、アメリカの巨大な経済援助がなければ、あのように順調に運ぶことはできなかったにちがいない。アメリカは食糧をはじめ、原料、燃料、衣料、薬品その他の物資を惜しみなく日本に援助した。その額は、見返資金特別会計設立後だけでも、二十億ドルに上ったのである。

アメリカの占領地域経済援助は、物質的なものばかりではなかった。アメリカは占領地域に多くのミッションを派遣して、多分野にわたる啓蒙や指導に努めていた。同時に占領地域から留学生を迎えたり、その地域の人々に研修も行っていった。その一つに、陸軍省所管の「ナショナル・リーダーズ・プログラム」というのがあった。それは占領地域の国会議員、学者、役人等を一定期間（私の場合は九十日間）アメリカに迎えて、特定のテーマについて見学、調査、研修等を行うものであった。

私は昭和二十六年九月、アメリカの科学技術政策調査のため、国会から派遣された参議院の高瀬莊太郎氏、衆議院の前田正男氏らと一緒に米陸軍省から招かれた。私の任務は、いわゆる研究開発事業の予算面を調べることであった。池田蔵相が、わざわざ秘書官の私をこのグループに参加させることにしたのは、私を次の総選挙に出馬させたいが、そのためにも一度アメリカを見せておきたい、という配慮があったようである。

われわれ一行は、軍用機で羽田からウエーキ、ハワイを経て、サンフランシスコに着き、それから汽車でワシントンに向かった。ワシントンでは約一週間程度、いわゆるオリエンテーションを受けてから、それぞれ各地に散って見学と調査を続けた。

私は中央、地方、官、民にわたって、科学技術の振興対策を調査する一方、各地の農事試験場、工業試験場はじめ、デュポンその他民間の研究所等を見学した。そうした機関のもっている豊富なスタッフと予算、とりわけ自由な研究的雰囲気は羨望の限りであった。アメリカでは中央も地方も、官も民も、大胆な研究投資を行っていた。「技術貿易」という術語は、技術収支の状況が、その国の経済的力量を計る一つの物差しであるということであろう。これまでのところ、技術貿易ではアメリカは輸出一〇に対し、輸入一の割合であ

るのに比べて、わが国のそれは全くその逆になっている。この潜在的な力はいつか、何かの形でその本領を發揮するにちがいない。そうしたことの背景には、アメリカの旺盛かつ大胆な研究投資のあることを想起せざるを得ない。

私が滞米中、サンフランシスコでは対日平和条約が、アメリカをはじめ五十数カ国の旧連合国の間で討議されていた。吉田茂首席全権以下、日本の全権団の写真と会議の様子が連日のようにアメリカの日刊紙の紙面を飾っていた。私はそれらの記事を読みながら、日本の独立回復の日が近づきつつあることを思い、胸を躍らせたものである。

やがてアメリカから帰国した私は、次の総選挙を目指して事前運動に入った。文字通り、「金帰火来」の選挙区詣でを繰り返すことになった。各市町村には、私と血縁、地縁に結ばれた人々、私と学校や職場を共通にする人々を中心に、後援会が次々に結成されていった。私の場合は、大蔵省に奉職していたので、酒や塩の製造、販売に関係される人々や、葉たばこの生産者が、まず私の陣営に参加してくれた。これらの方々からは、今日に至るまで^{から}渝らない支持を頂いている。

私は今でも演説が上手とはいえないが、そのころは全く未熟で、事実、砂をかむような

ものであった。そのため私の陣営では、選挙の成り行きを心配していた。ところが世の中は面白いもので、思わざるところに知己がいるものである。「ともかく、あんたの笑顔がかわいいから札（票のこと）を入れてあげる」という婦人達が出てきたり、道路ですれ違う馬車引きのおじさんからは、所も名前もいわないで「うちに五票あるから入れてやる。しつかりやんな」といって励まされたこともあった。

そのころの道路は砂利道が多く、ようやく国道の一部が舗装されていたにすぎず、その幅員も狭かった。また道路を往来する輸送機関は、牛馬車と自転車が多く、トラックや乗用車は稀であった。集会場にあてる建物は、たいてい木造の老朽校舎で、板の間いっばいにゴザを敷き、所々に火鉢を配置して暖をとりながらの演説会や座談会であった。

あれから四分の一世紀の歳月が流れた。今では道路の改修整備は進み、牛馬車は姿を消し、自動車交通は異常な混雑を来している。老朽校舎も立派な永久建築に改築されている。今昔の感を禁じ得ない。

第二十五回総選挙は、昭和二十七年十月一日に施行され、自由党公認で香川県二区から立候補した私は、幸いに初陣ながら当選を飾ることができた。四十二歳であった。

当選して上京してみると、広川農林大臣から「会いたいのので自宅まで来てくれないか」という電話があった。広川さんは、当時自由党の実力者であった。選挙中、私の選挙応援に来てくれる約束があったので、郡内一円に宣伝ビラを貼ったが、広川さんはいよいよ来てくれなかった。私は広川さんの勧誘を一度は断ったが、広川さんはなぜか執拗に来訪を求めたのであった。そこで、たまたま居合わせた朝日新聞の後藤基夫君（現常務）と一緒に、淡島のお宅を訪ねた。広川さんは長火鉢の前に、もんぺ姿で坐っておられた。見るからに酒屋のおやじさんであった。その当時、広川さんは、ただ一筋に吉田系のために骨を折っておられた。やがて大きな奉賀帳を持ってきて、「何でもいいから、来訪のしるしにここに署名してくれないか」といわれるので、私は素直に署名した。ところが、それがはしなくも、吉田派の署名であったことが後でわかった。

その頃、近くに引越された佐藤栄作氏（当時自由党幹事長）も、その日たまたま広川邸に見えられ、われわれと一緒に、広川さんから新築された離れの建築の自慢話を聞いたことを覚えている。

それからしばらくして、当の広川さんは、三木武吉氏等の説得によって鳩山陣営に走っ

たのである。「滄浪の水すまば以てわが纒えいを濯あらつべく、その水濁らば以てわが足を濯あらつべし」という言葉があるが、政界の地図というものは、その時の情勢次第で、変わりやすいものようである。もっとも広川さんは、その後逝去されるまで不遇であった。

「バカヤロー」解散

私が政界進出を遂げた昭和二十七年の選挙は、占領軍による公職追放解除後の初の選挙であった。鳩山一郎、三木武吉、河野一郎の各氏をはじめ、公職追放中の政客の多くが政界に復帰した。このため、それまでくすぶり続けてきた吉田、鳩山両氏の主導権をめぐる角逐はようやく顕在化して、政局は一段と緊張の度を加えてきた。

ところが、この角逐は間もなく、思わざる結果を生むことになった。それは、その年の十一月二十八日の池田通産相の不信任案の成立であり、次いで、翌二十八年三月十四日のいわゆる「バカヤロー」解散であった。

池田通産相の不信任案は、同氏が「中小企業の五人や十人が自殺してもやむを得ない」

という、蔵相時代の発言といわれるものを、肯定したために提出されたものである。問題のこの発言は、もともとそういう直接的な表現でされたものではなかった。それは中小企業の経営について、池田蔵相と記者団とのやりとりがあり、その論理的帰結ともいふべきものであった。したがって、特に問題にすべきものであるとは思えないものであり、事実、この発言があつてから何年もの間、問題にならなかつたものである。有名な池田さんの「麦飯発言」も同工異曲のものであつた。

ところが、こうして特に問題にならないことが新聞の記事になり、ひいては国会の問題になつた背景には、一方で池田さん自身に対する嫉妬や反感があり、他方では政界における吉田、鳩山両氏の主導権争いがあつたように思われる。池田さんは、初当選とともに蔵相になり、占領下でドッジ・ラインの実行に当たつた人であるから、嫉妬や反感を買うには十分な資格をもつていた。池田さんに「冷酷な政治家」という烙印を押す向きもあつたし、そのようなことを歓迎する政敵もいたにちがいない。いずれにしても池田さんは、そのために野党によって不信任に問われる羽目となり、鳩山系の同調によって不信任案が成立してしまつたのである。池田側近の私にとっては、本人と同様、手痛い打撃であつた。

私は政界進出早々、まずこうした冷たい試練のしぶきを浴びたのである。

越えて翌二十八年二月二十八日、衆議院の予算委員会で右派社会党の西村栄一氏が、吉田首相に国際情勢に関する見解を求めて質問に立った。ところが、その答弁に満足できなかった西村氏の執拗な食い下がり、吉田さんについては「バカヤロー」といつてしまった。二人の間に激しい不毛の応酬が続いた。西村氏はその発言の取り消しを求めたが、吉田さんは応じなかった。そのため右派社会党は、内閣総理大臣の「懲罰動議」を衆議院に提出したところ、この動議も鳩山系と広川系の同調によって可決されてしまった。

これに勢いを得た左右両派社会党は、共同して三月十四日に改めて「吉田内閣不信任案」を提出した。これに対しても、自由党内の反吉田系二十二人が同調することになり、二百二十九票対二百十八票でこの不信任案は可決された。吉田さんは、やむなく衆議院の解散をもってこれに応えることになり、同日の夕刻、大野伴睦議長によって、「憲法第七条により衆議院を解散す。御名御璽」という詔書が読み上げられた。一瞬にして、全代議士の議席は剥奪されることになってしまったのである。

このことは私にとっては、文字通り青天の霹靂であり、無情な仕打ちでもあった。当選

以来、院議に従つて年賀状も出さず、選挙区と没交渉に終始していた私は、全く当惑してしまつた。政治というものが、かくも非情残酷なものであることを痛いほど思い知らされたのである。

私の選挙はいうまでもなく、たいへん苦しいものであつた。大方の予想も、再選は覚束ないのでないかとの判断であつたようだ。しかし幸いに、支持者の涙ぐましい努力と、高知からの帰途、予定の遊説コースを迂回してまで来援してくれた吉田首相や、池田さんらの応援も手伝つて、私は辛うじて再選された。しかし、自由党所屬の一年生議員五十六人のうち、確か半分の二十八人が落選するという思わざる結果になつた。

保 守 合 同

吉田茂首相は、たしかに強いリーダーシップを持つすぐれた政治家として、内外の信望を集めていた。しかし吉田さんも、人心の倦怠には勝てなかつた。サンフランシスコにおける平和条約の締結を境として、人心は日とともに吉田政権から離れて行つた。政界にお

ける反吉田勢力も、じりじりとその勢いを強めつつあった。そこにもう一つの試練が訪れたのである。

昭和二十九年四月、造船疑獄事件の余波は、時の自由党幹事長佐藤栄作氏の身边にも及び、吉田さんは犬養法相に命じて、指揮権を発動させた。そのためか吉田政権に対する世論は、いよいよよきびしさを加えてきた。十一月二十四日には、ついに日本民主党が、自由党の反吉田系と改進黨によつて結成された。さらに同年十二月、各野党提出の内閣不信任案に対し、再度解散に訴えようとした吉田さんは、緒方竹虎氏を頂点とする党内勢力の支持が得られず、遂に十二月七日、総裁の座を緒方氏に譲つて、大磯に引き揚げてしまった。その日は木枯らしの吹く寒い日であった。官邸を去る吉田さんを見送る人影はまばらだった。前後六年八カ月の永きにわたつて首相の座にあり、卓越した指導力を発揮した吉田さんの退陣は、このように非情で淋しいものであった。

そして十二月十日、鳩山民主党内閣が成立した。これに呼応するかのように、左右両派社会党が統一を決議したのは、翌三十年一月十八日であった。かくて政局は急速に解散に向けて動き、鳩山内閣は二月一日、ついに総選挙を公示した。

私にとって三回目の選挙は、同年二月二十七日に行われたが、『鳩山ブーム』にわく民主党が、落ち目の自由党を抑えて圧勝した。自由党の議席は百七十から百十二に転落し、逆に民主党は百二十四から百八十五議席に劇的な躍進をとげたのである。

この選挙は、造船利子補給法案に伴う自由党員の収賄容疑、永きにわたる吉田政権に対する倦怠感のために、われわれ自由党は、終始守勢に回って戦わなければならなかった。しかし私は、この選挙で約一萬票の支持票をのばすことができた。それは前回の選挙以降の努力と、自由党の孤塁を守って終始真剣に戦ったことが、有権者の支持を得たからであるように思う。

選挙の結果、三月十九日、第二次鳩山内閣は自由党の賛成投票を得て成立した。民主党を基盤とする少数与党内閣であった。「保守合同」への気運がにわかに高まったのは、そのころからのことである。

民主党は、選挙で勝った余勢を駆って、保守合同への主導権を握ろうとしていた。その中心は三木武吉氏であった。三木さんは高松の出身で、同郷の私に親近感をもっており、私が池田勇人氏の側近であることも十分勘定に入れて、私との接触を強めてこられた。三

木さんの求めによつて、牛込山伏町のお宅を訪ねると、細い針金のような手で魔法壇に入つたお粥をすすりながら、「保守勢力を合同させて、衆参両院で三分の二以上の議席を確保し、現行の『占領憲法』を改正する。そうしないと、自分は死ぬに死ねない」といわれるのであつた。私はその意気は壮とするものの、当面その実行は不可能に近い所以を反論して、そのつど三木さんからお叱りを受けたものである。

三木さんはまた、後輩の私に対して、政界に処する道をじゅんじゅんと説かれもした。同志に対する思いやり、政治資金の集め方と使い方などについても、親切に説いて聞かせてくれたものである。

三木武吉・池田勇人両氏の会談は、その年の夏から秋にかけて、私の斡旋で何回か行われた。場所は築地の「栄家」であつた。しかし、両氏の話はしつくりかみ合うところまではいかなかつた。池田さんはもともと、そのいきさつから保守合同にはあまり乗り気ではなかつた。また、合同した保守勢力にもし間違いがあれば、とり返しのつかないものになるおそれがあると思つていたようである。私自身も、憲法改正と占領地行政の打破を性急に目論む保守合同には心から賛成できないばかりか、若干の憂慮をもつていた。しかし、

こうした観念論よりも現に政権をとつた民主党側の勧誘と説得の方が、より魅力があつたにちがいない。保守合同への歩みは急速に進み、世論も次第にその方向に固まつて行つた。

ある日の朝、私は三木さんから一つの伝言を頼まれた。それは「今日の新党促進協議会の常任委員会では、できたら池田君は何も発言しないようにしてもらいたい。自分がそういうお願いをしておつたということ伝えてくれ」というのであつた。私は正直にそのことを池田さんに伝えたが、池田さんは黙って聞き流しておられた。

当日の委員会は、そんなに時間がかからなかつた。その日、私は衆議院の食堂脇で三木さんと会つたが、三木さんは「ありがとう。うまくいったよ」といわれた。かくて保守合同は民主党側の主導の下に実現し、十一月十五日、自由民主党が結成され、同二十二日には第三次鳩山内閣が成立したのである。